

「どうせ酔った勢いで
しょう」って笑ったら、
翌朝も翌週も腕の中で
した——取引先の
エリートに一途すぎる溺愛
をされています

背筋を、声が貫いた。

「——高梨さん」

聞き間違えるはずがない。電話越しに何十回と聞いた低音が、うなじの産毛を逆撫でるほど近くから降ってきた。

深夜一時過ぎ。新宿の路地裏、コンビニ前。蛍光灯の白い光の下で、私は凍りついた指先でタクシーアプリを操作していた。三次会まで流れた慰労会の最後の一人——酔い潰れた田中さんをタクシーに押し込んで、運転手に住所メモを渡して、それで全部終わった。ビールは半分残した。あとはずっとウーロン茶。誰かが悪酔いしたときの保険係。いつもそうだ。

振り向いた。

日向悠真が立っていた。ジャケットの襟を立てて、息が白い。少し上がっている。——走ってきたのだ。

「探した」

たった二文字なのに、胸の奥を鷲掴みにされた。

「三次会、いらっしゃらなかったんですか？」

声が震えないよう、唇に力を入れる。困ったときに出る、何でもありませんの笑顔。

「お前が消えたから出た」

日向さんの声にはいつもの涼しさが無い。低くて、剥き出しで、怒っているようにも聞こえた。

「二次会の途中で、田中さんをタクシーに乗せてるのが窓から見えた——そのあと店に戻って来なかっただろ」

見ていた。窓から。あの人混みの中で、私のことを。

「すみません、お手間をかけて」

そう言った瞬間、日向さんの眉間に皺が刻まれた。何かを堪えるような顔。

「謝らなくていい。——俺が勝手に探しただけだ」

沈黙が落ちた。コンビニの蛍光灯がジジ、と小さく鳴った。

「高梨さん。飲み会で、ずっとウーロン茶だったの知ってる」

心臓が跳ねた。

「田中さんが吐いたとき、自分のハンカチ出してたのも。精算の誤差を黙って自分のカードで埋めてたのも」

——全部。

「すごいな、お前は。全部やって、全部黙って、全部一人で片付ける」

日向さんが一歩、距離を詰めた。

「——で、最後に一人でコンビニの前で凍えてる」

声に怒りはない。ただ、ひどく切なそうだった。

「慣れてますから」

笑えた、と思った。いつも通りの笑顔が貼れたはずだった。

でも日向さんはもう一歩近づいて——体温が、届くほど近い。

「慣れるな」

低い声が、鋭く刺さった。

「——そういうのに、慣れないでくれ」

笑顔の裏側で積み上げてきた「平気です」の壁が、たった一言で罅割れた。

日向さんが上着を脱いだ。まだ温もりの残るジャケットが肩にかけられる。重い。柔軟剤と、微かな煙草の残り香と、この人自身の匂いが混ざっている。

「十ヶ月前。電話で、前任のミスをお前が被ってた」

「……え」

「あの日から、お前のことが頭から離れない」

三月末の夜風が首筋を撫でた。ジャケットの温もりが肩から胸へ染みてきて、その重さに泣きそうになる。

「——私なんかを、なぜ」

「お前のその『なんか』が、俺を十ヶ月狂わせてんだ」

歩いて五分だ、と日向さんは言った。俺の家。嫌なら言え、タクシーを呼ぶ。

嫌と言うべきだった。取引先のアカウントプランナー。月に三、

四回の電話と週一のメール。それだけの関係だ。行くべきじゃない。

でも口が動かなかった。

肩にかかったジャケットが、まだこの人の体温を含んでいて、脱いだら凍えてしまいそうだった。

隣を歩いた。日向さんは無言で車道側に回った。さりげなく。当然のように。

「高梨さん」

「はい」

「今日、電話の声と違う」

足が止まりかけた。

「電話のお前は、語尾が少し上がる。余裕があるときは『です』が柔らかくなる」

日向さんは前を向いたまま言った。

「今日のお前は、ずっと語尾が下がってた。——疲れてるのに笑ってただろ」

声だけで。電話越しの声だけで、十ヶ月。この人は私の心の水位を測っていた。声のトーンが上がる日と下がる日。無理をしている日と余裕がある日。全部、聞き分けていた。

丸裸にされていた。見えない場所から、声だけで。

「無理すんな」

「無理じゃないです。これが普通なので」

「——それが無理だって言ってんだ」

築浅のマンション。五階。エレベーターの中で、金属の壁に二人の影が映っていた。

部屋に入ると、壁一面の本棚が目に入った。ソファの上にブランケット。読みかけの文庫本がテーブルに伏せてある。電話の向こう側にあった生活が、ここにある。

日向さんは洗面所からタオルを持ってきた。私の手を取って、冷えきった指をタオルで包んで、擦った。ただ温める。それだけのことを、丁寧に、時間をかけてやる。

「……なんで」

「冷えてるから」

それだけ。でもそれだけが胸を抉った。冷えた手を温めてくれる

人のいない暮らしを、もう何年もしていた。

マグカップにほうじ茶を淹れてくれた。湯気が立つ。両手で包む。じんわり熱い。

ソファに並んで座った。近くない。遠くもない。逃げられる距離。

「高梨さん」

「はい」

「さっき、『なぜ私なんか』って言ったよな」

「……はい」

「答える」

日向さんの声が、静かに深くなった。

「お前の電話の声が好きだ。十ヶ月間、木曜の午後の電話だけが楽しみだった。お前が『お疲れ様です』って言うだけで、一週間の疲れが消えた」

マグカップを持つ手が震えた。中のほうじ茶が波打つ。日向さんの手がそっとカップごと支えた。

「信じられないですよね。——酔ってるんじゃないですか」

「一滴も飲んでない。お前が飲まないから、俺も途中からやめた」

目の奥が熱くなった。泣きそう。泣いていいのかわからない。

日向さんの手が額に触れた。前髪をかきあげ、おでこを晒す。夜気を遮るように、額の上をゆっくり撫でる。

「泣いていい。——ここには、お前に笑顔を強いる奴はいない」

涙がこぼれた。止まらなかった。声は出さない。いつも通り。音を立てない泣き方しか知らない。

日向さんの親指が頬の涙を拭った。そのまま顎に触れて、上を向かされた。至近距離で目が合う。焦げ茶の瞳に間接照明の光が映り込んでいる。

「——キスしていいか」

答えられなかった。でも目を逸らせなかった。逸らしたら、この瞬間がなかったことになる。

唇が触れた。

最初は唇の端。確かめるように。壊れものに触れるように。私が

息を吸った隙に、正面から重なった。

柔らかい。涙の塩味がする。日向さんの舌が下唇をなぞって、口がひらいた。舌が入ってくる。ゆっくり。丁寧に。口の中を隅々まで味わうように絡めてくる。唾液の味が混ざって、鼻から短い呼吸が漏れた。

唇が離れたとき、透明な糸が引いた。

「……ほうじ茶の味がする」

日向さんが笑った。でも目は笑っていない。熱い。暗い。貪りたい、という顔。

指がニットの裾に触れた。身構えた——けど、払いのけなかった。

「脱がせていい？」

頷いた。声が出ない。

ニットが持ち上げられて、頭の上を通り抜けた。キャミソールの下、シンプルな白いブラ。飾りなんて何もない。今日こんなことになるなんて思っていなかった。

「……ごめんなさい、こんな下着で」

「お前らしくていい」

日向さんの声が低く軋んだ。

「——飾らないところが好きだ」

好き、と言われた。下着を見て。羞恥と、それ以上の何かが胸の奥でぐちゃぐちゃに絡まる。

指一本で、キャミソールの肩紐が下ろされた。片方ずつ。鎖骨が剥き出しになる。日向さんの唇が鎖骨に落ちた。吐息が肌を撫でて、首筋を上り、耳の裏——

全身が跳ねた。

声が出そうになって唇を噛んだ。噛みしめた歯の隙間から息だけが漏れる。

日向さんの唇が耳の裏に張りついたまま、吐息を吹きかけてきた。腰が痙攣的に揺れた。自分の意思じゃない。身体が勝手に反応している。

「ここか」

囁きが、鼓膜を直接揺らした。

「電話で声を聞いてるとき、たまにお前の息遣いが変わるタイミングがあった。受話器を耳に当て直したときだ。——耳が敏感なんだろうと思ってた」

電話越しの息遣いから。十ヶ月間の通話で。この人は私の身体の秘密を読み取っていた。

「やだ……聞いてたんですか、そんなことまで」

「全部聞いてた。——お前の声しか聞いてなかった」

舌先が耳の裏をなぞった。とろりと、ゆっくり。濡れた感触に下腹が疼いて、太腿の間がじわりと熱くなる。

「んっ……」

小さな声が漏れて、自分で驚いた。

ブラのホックに指がかかった。背中に沿う手のひらが大きくて熱くて、パチンと外された瞬間には身体から力が抜けていた。

肩紐が落ちて、胸が晒された。小ぶりの膨らみ。薄桃色の先端が、冷気に触れて尖っている。

腕で隠した。反射的に。

日向さんの手が私の腕を掴んだ。力が入っていない。でも「どける」という圧がある。

「隠すな。見せてくれ」

腕が降りた。日向さんの視線が胸に落ちて——息が詰まるような間があった。

「……きれいだ」

そう言って、乳首に唇を寄せた。

舌先が先端をなぞった瞬間、背筋に甘い痺れが走った。ゆっくり含まれて、吸われる。歯は立てない。舌で転がされる。もう片方の手が残った乳首を指先で挟んで捻った。左右で違う刺激。合わない拍子に身体が揺れて、ソファのクッションを掴む指が白くなる。

喉の奥で声を殺した。唇を噛む。噛みすぎて痛い。でもここで声を出したら——出してしまったら——。

日向さんが顔を上げた。私の唇を見た。赤く腫れている。噛んだ跡。

「唇、噛むな」

親指が下唇に触れた。噛むのを止めさせるように、柔らかく引く。

「声を出すな、って——どこかで言われたか？」